

前回、お互いの農場における生産管理の仕方の違いについて語り合った(株)三豊セゾンの谷本幸弘氏と(有)竹内園芸の山中高志氏。今回は谷本氏が、苗の生産管理システムの改善に携わる山中氏に、就農した経緯や仕事を進める中で直面した問題、見出した仕事観などについて話を聞いた。

谷本 山中さんは竹内園芸さんに入社して約1年になるそうですね。どういう経緯で入社されたんですか？

山中 妻の実家がある徳島県への移住に合わせて竹内園芸に転職しました。転職先を探すにあたってハローワークの合同説明会に参加したんですが、その中でなぜか気になったのが竹内園芸だったんです。

谷本 転職先を探す際は、どういった条件で探されていたんですか？

山中 家庭の事情もあったので、転職がないことと不定期ではない仕事という条件で探していました。できれば今までかわったことのない業界で、デスクワークではなく外に出て行くような仕事をしたいという気持ちもありました。

谷本 説明会のときは、竹内園芸さんは生産管理システムの担当者を求人していたんですか？

山中 いえ、そういうわけではないんです。前職では、建設機械メーカ



リレー訪問 農場に勤める と誇り 夢

第21回

苗は、品質が不安定な工業製品

……の巻

今月のゲスト

谷本 幸弘 (34歳)

出所備

身：兵庫県神戸市

属：(株)三豊セゾン (香川県観音寺市)

考：1973年生まれ。95年、神戸大学経営学部卒業後、カタログ通販大手の(株)千趣会入社。営業・商品企画を担当。2000年、(株)三豊セゾンに入社。04年、同社を退社し、独立を試みるも諸事情により断念。(株)丸山製作所に入社。06年、三豊セゾンに専務取締役として復帰。主に栽培管理全般とスタッフの管理を行なう。

1で部品の販売管理システムのメンテナンスなどもしていました。それを面接で社長に話したところ、生産管理システムはかなり前からあったようなんですが専任の担当者がいないということで、僕にその仕事をやってもらえないかという話になったんです。苗業界全体の生産量がどんどん増える中で竹内園芸の生産量も伸びていて、ちょうど生産管理システムの改善が必要とされている時期でした。タイミングも良かったんですね。

谷本 生産管理システムは、山中さんがゼロから作っていったわけではないんですね。

山中 ええ。1997年ごろには導入していたようですね。企業にパソコンが普及し始めたばかりのころにもかわらず、生産管理システムの価値に気付いて効率化を図っている点には僕も驚きました。

谷本 ところで、農業には関心はなかったんですか？

山中 多少はありました。それに、農業は廃れてはいけない産業ですし、そういった意味でのやりがいは感じました。

谷本 山中さんには、デスクワークではない仕事があったという思いもあったようですが、今はその辺りのことをどう考えているんですか？

というのも、うちの農場が欲しい人材と、就農希望者のやりたいことが合致しているかというところに疑問などところもあって、求人方法から再検討しているところなんです。

山中 生産管理システムを改善していく仕事が必要な業務ではあるのですが、実際はデスクワークだけをしているわけではないんです。繁忙期はもちろん現場で苗の出荷なども手伝いますので外に出る機会もあるんですよ。といっても、前職でシステムの管理をまかされたときには本当に嫌々やっていましたし、正直、パソコンを使う仕事も好きではないんです(笑)。



谷本 そうなんですか(笑)。

山中 でも、今はこの仕事で自分に合っていると思えるようになりまして。やりたい仕事と自分に合っている仕事は、実は違うんですよ。それに、仕事をするうちにパソコンを使うだけの仕事ではないということもわかったんです。パソコンでシステムを作るということは物事を数字で評価するということなんです。それは現場を知っているからこそできることなんです。生産管理システムは生産するための道具でしかないわけですし、パソコンを使う作業をするとはいえ、軸足は現場にある仕事なんです。

谷本 なるほど。

山中 うちの場合はハウスごとに担当者が決まっています。それぞれやり方が違ったりもするんですが、苗の出荷のためにあちこちのハウスを廻って作業していると、実際に会社全体がどう動いているのかも見えるようになってくるんです。

谷本 そうすると生産管理システムの改善点にも気付きやすくなりそうですね。

山中 そうなんです。こういった僕自身の体験を踏まえると、就農希望者のやりたいこととは違って、いろいろな仕事をやらせてみるのもいいんじゃないかと思えます。

谷本 そうですね。山中さんのような方が来てくれればいいんですけど(笑)。それにしても入社1年目なのに現場全体のことを理解して、さらに、それをシステムに反映させていくというのは大変ですよ。

山中 注文に対して作った商品を出していくという流れ自体は、どの業界でも基本的に同じですし、システムについても前職でやっていた販売管理と生産管理には似ている点もあるんです。もちろん異なる点もあるので、本を読んだりして勉強しながら進めています。といっても、参考になる本は製造業の工場生産に関するものくらいなんです。そういう

今月のホスト

山中 高志 (30歳)

出身 広島県広島市
所属 (有)竹内園芸 (徳島県板野町)
経歴 1977年生まれ。2002年、徳島大学大学院エコシステム工学専攻修了後、建設機械の製造・販売を行なうコベルコ建機(有)入社。海外部品グループに配属。07年、野菜苗・花苗を生産する(有)竹内園芸に入社。現在、IT・システム担当。



えは、苗の生産は工業製品の生産とよく似ているんですよ。

谷本 そうなんですか。

山中 品種やサイズといった一定の規格があつて大量生産するという点も共通点ですし、工業製品の場合も苗の場合と同様に全く同じものが生産できるわけではない、やはり不良品は出るんです。生産管理ソフトも、その割合を考慮した作りになっています。そういう視点から見ると、苗はブレや不良品の出る割合が製造業に比べて非常に大きいので、「品質の安定してない工業製品」というようなイメージを持っています。

谷本 なるほど。露地野菜などは苗

に比べて生産にかかる日数が長いですし、その間に天候の影響も積み重なってくることを考えるとブレも当然大きくなってくる。苗は、工業製品のなアプローチが通用しやすいものかもしれませんね。

山中 そう思います。農業の場合は現場の人なり社長なりが経験として蓄積している数値化できない部分に頼らないといけない局面が多くはありますが、これを数字で表すことで管理がしやすくなる点もあるので重要なことだと思います。大量生産になると1人で管理できなくなつて当然ですし、働く人が同じ情報を共有できる状態にすることで、新たに

きるようになることも出てくるのではないのでしょうか。

谷本 山中さんが担当されている仕事には、そういう意味合いもあるのかもしれませんね。

山中 ただ、農業に限つた話ではないのですが、生産管理システムの効果をどう評価するかは、なかなか難しい問題なんです。システムが入つたことで明らかに売り上げが伸びたということであれば、その効果もわかりやすいんですが、少し改造したくらいでは売り上げが変わるほどの影響はないですから。いずれにしても数字で表さないことには効果は見えてこないのですが。

谷本 たしかに評価は難しそうですね。それに加えて現場の人は数字で語ってくれるわけではないですから外注先のシステム業者に伝えるのも大変でしょうね。

山中 現場の人には、やはり口下手な人が多いんですね(笑)。それに生産管理システムの使い勝手に不便があつても、そういうものだと思います。んでしまうよう改善についての要望も少ないんです。それで改善が進みづらくなつてるところもあるんですよ。

谷本 そういった現場の人の気持ちには僕もよくわかります。システムが変えられるものだという発想にまず

ならないですからね。改善していきけるものだといいことを伝えるところからのスタートになりますね。

山中 そうなんです。だから現場の動きを見ながら、逆にこちらから改善案を提案していくこともしていきたいと思っています。

谷本 いくつか問題もあるようですが、やりがいのある仕事ですよ。

山中 そうですね。60〜70人のスタッフがいる中で、この仕事を担当しているのは僕1人だけなんです。自分だけの仕事を持つということにはやりがいも感じています。同時に、自分がやらないと進んでいかないわけですし、1度のシステムの改造に何十万円という費用がかかるものでもあるので、責任の重さも感じています。

谷本 将来のビジョンは何かあるんですか？

山中 正直、あまり先のことまでは、まだ考えることができていないんです。ただ、現場のことはもつと知りたいですね。今後は、農業全般についても勉強していきたいと思っています。

谷本 それは頼もしいですね。頑張つて下さい。今日はいい勉強になりました。ありがとうございます。

山中 こちらこそ、ありがとうございます。